

## 日本語教育実践研究（1）

### —「待遇コミュニケーション教育／学習」の実践—

蒲谷 宏

日本語教育実践研究（1）は、「待遇コミュニケーション教育／学習」について、実際の教育活動を通じて研究するためのクラスです。主に、中級後期から上級前期にかけての学習者が受講する口頭表現クラス（口頭表現6 Bクラス）を実習の場として、学習者の口頭表現（音声コミュニケーション）における表現能力（コミュニケーション能力）を高めるために、どのような教育／学習をすればよいのかを実践的に考察していきます。それとともに、具体的な教材、教育／学習の方法論についても検討していくこととなります。

2004年度春学期は、受講生は4名で、全員が「待遇コミュニケーション研究室」在籍のメンバーであったため、これまで以上に、音声コミュニケーションとしての「待遇コミュニケーション」の能力を高めるためにどうすればよいのか、という話し合いを重ねつつ、実習クラスでの授業運営を進めていきました。

〈学習者が、ある「場面」において、「意図」を持って、コミュニケーションを行う能力を身につけ、高めていくためには、どのような授業を行えばよいのだろうか〉、受講生たちは、それについて考え、実践していくために、実践研究の授業時間外での検討や準備にも多くの時間を割き、努力を積み重ねてきました。

その一つの成果が、今回まとめられた論考「口頭表現クラスにおける「待遇コミュニケーション教育」の試み」です。

特に実習クラスの授業中に様々な形で導入した、ロールプレイについては、試行錯誤を繰り返しながら、いくつかの発見・再発見をしてきたと思います。学習者の問題点を修正する方法としての、〈練習—訂正—練習〉といった二段階法が効果的であったことは、一つの大きな再発見であったように思います。

「待遇コミュニケーション教育／学習」に関する課題は山積していますが、実践研究は、そうした課題に対して、実践を通じて解決策を考えていくという意味を持っているのだと言えるでしょう。今後は、そうした実践を通じて得られた成果について、さらに研究を続け、検証していくことが期待されます。

（カバヤ ヒロシ・日本語教育研究科教授）